

今号の掲載図は、大正五年測図、大

正八年発行の五万分一の地形図「旭川」である。牛朱別川の切り替え前の

地図で、現・ロータリーから現・五条一丁目へ四条西六丁目にかけて牛朱別川が流れていた頃の地形図である。

ご覧のように、ここに「亀吉島」と「亀吉川」が記載されている（亀は旧字体の「龜」使用）。亀吉島の由来は、旭川初の和人定住者の鈴木亀蔵の旧居が、X印の所にあったことによる。現在は亀公園に旧居碑がある。鈴木亀蔵は明治十年頃からアイヌの人たちとの交易のためにここに居住したと言われる。アイヌの人たちが、亀蔵と発音しにくいため、通称・亀吉と呼んだところから、亀吉島と呼称されたというのが、定説

亀吉川 II ポロメン (上)

となっている。その亀島を作つている石狩川の旧流が、亀吉川であつた。その亀吉川は埋め立てられて、幻の川となつたのであつた。

さて、松浦武四郎が安政四年(一八五七年)に旭川を調査した時は、亀吉川を「ポロメン」(表記はホロメン)と記録した。すなわち、ポロメン II

意味であるが、旭川の場合は、その他に、亀吉川がそうであるように、「古川 II 旧流」も意味していた。

また、ポロメンの対語として、ポンメン II ポン・メム (pon-

mem 小さい・泉池) があり、

松浦武四郎は、石狩川左岸の

ポロメンから、少し上流に上

った同じく左岸にポンメン

(表記はホンメン) があり、

ここに八軒のアイヌの人たちの住居があり、その全住人の名前と年齢を記録している。

他方、A 地点から、石狩川の上流調査では、C 地点で、「ホロメンー右の方相応なる川に成るなり。この下なるブト (put一川口) はチクベツ番屋 (★印) の下え出るよし也。」と、

ポロメン (亀吉川) は、石狩川本流の C 地点から、忠別川の番屋の下流の B 地点に流れている相応の川であると書いてある。B 地点と C 地点との記述が一致しており、これがポンメン・ポンメンと混同し、同

た。決定的な違いは、石狩川の右岸にあるか、左岸にあるかである。

松浦武四郎の「再築石狩日誌」で

右の点を確認しておこう。武四郎は、丸舟に乗り石狩川を上り、忠別川との合流点(A 地点)から忠別川左岸の★印の大番屋を目指した。合流点から五・六丁にて、「メムブト (B 地

池) と、一般的には誤されている。メム (mem) は、一般的には、「清水が湧いて出来ている池、または沼」の意

味であるが、旭川の場合は、その他に、亀吉川がそうであるように、「古

川 II 旧流」も意味していた。

と、左にポロメン (亀吉川) があり、流れは遅く、深い川で、上流は C 地点の石狩川に通じていると書いてある。

他方、A 地点から、石狩川の上流調査では、C 地点で、「ホロメンー右の方相応なる川に成るなり。この下なるブト (put一川口) はチクベツ番屋 (★印) の下え出るよし也。」と、

ポロメン (亀吉川) は、石狩川本流

の C 地点から、忠別川の番屋の下流

の B 地点に流れている相応の川であると書いてある。B 地点と C 地点との記述が一致しており、これがポンメン・ポンメンと混同し、同

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

(22)

高橋 基



たまたま、明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図に、掲載図の右上に記載した

ポロメン・ポンメンが書かれため、松浦の採録したポロメン・ポンメンと誤解されるようになつ